第８章　総括

資 料 ５

第１節　発掘成果からみた加曽利貝塚の重要性

第７章でとりまとめた発掘成果によって加曽利貝塚の重要性を挙げると

・東京湾東岸貝塚群のうち、貝層が最大規模を有する。

・縄文時代中期から晩期前半にかけて東京湾東岸に形成された大型貝塚群のうち、堤状の貝層を形成した初源的な集落である。

・主たる時期の異なる二つの大規模貝層が接触して８の字状をなす唯一の事例であり、北貝塚の環状貝層を完成したのが後期であることが確認されたことにより、こうした構造を形成する意図が存在したものと推定される。

・開発に伴う破壊が主要部に及ばない稀有な事例であり、東京湾東岸の代表的な貝塚のうち保存状態がもっとも良好である。

・貝層の保存状態が良いため、動物遺体、骨角歯牙貝製品、炭化種子、赤彩土器等の保存状態がきわめて良好である。

・中期大型貝塚形成－終焉と小規模集落群の形成－後期大型貝塚群の形成から衰退という社会の大きな変革期を挟む約 2,000 年間の居住が認められ、１遺跡でその間の生産・居住様式の変化を分析しうる唯一の存在である。

・竪穴住居跡の分布密度がきわめて濃い。貯蔵・廃棄・埋葬等の集落を構成する様々な遺構が多数存在すること。集落内の道の存在も予想される。

・埋葬人骨がきわめて多い点では東京湾沿岸の大型貝塚群のなかで突出した存在であるものと考えられる。人骨から得られる情報は飛躍的に増えており、これまでに収集されている資料としての価値もきわめて高い。

・オオツタノハ製貝輪やヒスイ製大珠など、遠隔地から持ち込まれた稀少性の高い遺物のなかでもとくに優品が出土する。

以上の諸点から、加曽利貝塚は東京湾東岸の貝塚群を代表する存在ということができるであろう。

第２節　貝塚の重要性と加曽利貝塚の位置づけ

日本列島の貝塚は、以下の点から、日本の歴史あるいは人類の歴史を語る上で欠くことができない重要な価値を有していると考えられる。

日本列島の貝塚の重要性

・貝塚は、日本考古学の形成・発展の中心にあり、古くからとくに重要な遺跡として位置付けられてきた。そのことは、貝塚が縄文時代の史跡の３割以上を占めていることにも表れている。

・縄文人は、日本列島各地において数多の食資源を見出し、獲得・加工・保存の技術を研くとともに、利用可能な食材を組み合わせて計画的に生産・消費する資源利用システムと食文化を作り上げた。貝塚は、そのことをもっとも端的に物語る証拠であること。

・数千年前の資源利用や食糧生産、食の内容を具体的に語ることができる資料が、これだけ豊富に揃っている地域は、世界を見回しても他に存在しないと考えられること。

・動物考古学や古環境分析、人骨の同位体分析による食性の復元等の分析・研究方法の発展と、成果の蓄積によって、縄文人の食や資源利用の多様性が明らかになるなど、益々その可能性が広がっていること。

東京湾東岸の貝塚の重要性

第１章第２節２に示したとおり、全国の縄文時代貝塚約 2,400 か所の６割弱は関東地方にあり、３割近くが千葉県に所在している。県内では、東京湾水系に約７割が集中し、市町村別では千葉市 123 か所が他を圧倒する。東京湾内の水系別には、都川水系が、全体数でも、大型貝塚の数でも半数を占め、次に多い村田川水系を合わせると 92 か所、約 75％を占める。二つの水系は隣接しており、この都川・村田川水系こそ縄文時代貝塚の中心地と見なすことができる。さらに、周辺の開発に伴う発掘調査の事例が多かったことにより、貝塚の分析成果が全国のなかで最も豊富である。とくに、千葉市緑区おゆみ野地区の貝塚群については、大型貝塚の数例と広域の集落群の全容を知り得るものとして並ぶもののない貴重な資料となっている。一方で、都川流域の大型貝塚の大半は保存されており、発掘資料、遺跡に保存された資料とも充実していることが、当地域の貝塚群の最大の特徴にして魅力であると考えられる。

東京湾東岸の貝塚は、以下の点から、日本列島の貝塚のなかでもとくに重要な価値を有していると考えられる。

・東京湾東岸には、史跡指定された貝塚がもっとも多いばかりでなく、規模や内容においてこれらに匹敵する未指定の貝塚が数多く存在する。

・大規模な貝塚のほとんどが集落遺跡であり、竪穴住居跡を初めとした遺構や、埋葬遺体を多数包含しているため、歴史の主人公たる縄文人の形質、多くの人口と長期に渡る安定的な生活様式、それを支えた生産基盤や社会を併せて考究できる。

・発掘事例が多く、出土資料や情報、学術的成果の膨大な蓄積があるため、水系・遺跡群単位の通時期的な比較・分析研究が可能である。

・縄文中期に形成された広く豊かな内湾干潟が、近年の埋立て以前まで安定的に存在した。弥生時代から近世に至るまで多くの集落で貝層を形成しており、日本の伝統的な食文化、資源利用システムのルーツや醸成の過程を詳細に考究し得る。

・縄文時代早期後葉以降、7,000 年にわたる各時代の集落や河口低地に各時代に貝層が形成されており、民衆の日常の食や海と人との関わりを通時代的に検討し得る。おそらく、世界的にみてもこれだけ密集する地域はほかにないであろう。

第１節に示したとおり、加曽利貝塚は東京湾東岸の貝塚群を代表する存在ということができる。

第３節　今日までに付加されてきた価値

第２章第１節「調査･研究の歴史」では、加曽利貝塚がどのように認識され内容が解明されてきたか、また、学界や文化財保護行政、さらに日本･地域の社会にどのような影響を与えてきたかを記載し、各調査の意義を述べた。そこでは、日本の考古学･人類学の始まり、大正期の実証主義的な発掘と考古学研究法確立に至る重要な局面で加曽利貝塚がその舞台となったことをみた。また、日本の文化を代表するものとして、海外に紹介されるという栄誉を得るなど、遺跡をめぐる様々な歴史のなかに加曽利貝塚の名が深く刻まれていったことをみた。

第２章第２節「加曽利貝塚の保存の歴史」では、保存・整備に至る経緯と、保存運動の行われた時代の背景や保存運動がもたらした影響について紹介した。また、巻末資料２に保存の実現に至るまでの経緯を記した。そこでは、保存の実現の骨子について、千葉市民や全国の研究者・学生をはじめとした多くの人びとの思いを市が受け止め、市の保存に向けたつよい意志や、多くの関係者の熱い思いが、最後は国を動

かして保存が実現した、ととりまとめた。南貝塚の大発掘の際、多くの調査参加者や見学者、そして保存の議論をした国・県・市の行政関係者が加曽利貝塚のすばらしさを実感し、保存すべきと考えたからこそ遺跡は残ったのであろう。

現在に至るまで、この遺跡に特別な思いをもつ市民や研究者がことのほか多いのも、この発掘の影響がもっとも大きいと考えられる。こうした意味で、保存の決め手は北貝塚の発掘であり、南貝塚の大発掘であったということができる。

今回、加曽利貝塚の歩みを振り返る作業によってもっとも深く印象をもったことは、いかにたくさんの人がこの遺跡に関わってきたか、ということである。そして、文化財保護や日本考古学の発展が、こうした多くの積み重ねの上にあることが厖大な資料として保存されていることである。これこそは当遺跡の大きな財産といえる。

第２章第３節「史跡整備と博物館」では、加曽利貝塚で進められてきた史跡整備の経過と概要、史跡内に建つ千葉市立加曽利貝塚の活動の歩みをまとめた。

加曽利貝塚における今日までの史跡整備の最大の特徴は、史跡として保存された当初から続く「野外博物館」構想にある。集落と貝塚だけでなく、周辺の地形や自然環境も併せ、来場者が自身の目で確かめ、当時の暮らしのようすを実感できるような史跡と博物館を目指してきた。とくに発掘された竪穴住居跡群や貝層をそのまま露出し、展示している野外観覧施設は、試行錯誤を繰り返しながら進められ、全国各地の史跡整備へその成果が拡散していったことは、第１節、第２節で述べた学術的な成果、保存運動における役割と併せ、加曽利貝塚の大きな価値といえる。

第２章第４節「活用の広がり」では、現地を離れた場所での活用として、歴史教科書への掲載の歴史等、学校教育における活用について述べた。後藤和民が貝塚・集落研究の発信を精力的に進めた 1980 年代から 1990 年代、加曽利貝塚は歴史教科書に盛んに取り上げられた。授業形態が多様化する中、加曽利貝塚を素材に、生徒たちに当時の暮らしを考えさせ、討論させる取組みが行われるなど、学校教育現場でも様々な活用が図られた。

貝塚は人骨をはじめ、数多くの情報が残されていることから、視覚的に当時の暮らしや文化を考える素材を提供することができる。加曽利貝塚と学校教育の関わりの歴史は、地域の素材を用いて主体的に歴史を学ぶための実践の歴史であり、今後、縄文時代や貝塚の価値を伝えていくための活用を図る上で学ぶべきことが多い。

第２章でまとめた成果に基づき、今日まで付加されてきた価値は以下のように整理できる。

１　日本の考古学・貝塚研究における意義

①考古学黎明期の重要遺跡

明治期の貝塚遠足会で生まれた興味関心が学問的関心を生み出し、日本考古学・人類学の出発点となった。加曽利貝塚はその代表的な存在といえる。

②近代的考古学の出発点

大正 13 年の山内清男、八幡一郎、甲野勇らによる加曽利貝塚の発掘調査は、層位学的な調査法と、土器による編年学確立の端緒となるもの。日本における近代考古学研究の出発点と評されている。

③関東地方の土器型式の標式遺跡

中期の加曽利Ｅ式土器、後期の加曽利Ｂ式土器が設定され、当遺跡の名前を学界に永遠に残した。

④遺跡発掘の手本が示された

大山柏による、日本人初の貝塚の地形測量、発掘地点の記録、人骨の詳細記録等先駆的な業績であり、大型貝塚の全体像を周知するとともに遺跡発掘の手本となった。

２　文化財保護・活用の歴史上の意義

（１）広域保存の実現と、文化財保護に与えた影響

①開発の危機が何度もあり、そのたび開発か保存かを巡る議論が重ねられてきた。そのたびに発掘成果や専門家の意見よる価値判断と、多くの市民・研究者の努力によって保存が実現してきた。その結果、住宅開発が進む都市部において、周辺の景観も含めた広大な地域が保全されている。
②遺跡周辺は、台地・斜面地・沖積低地・湧水池・湿地・河川という里山環境が良好に保存され、多様な生態系を育んでおり、こうした景観は、縄文集落の借景として機能し、史跡の来訪者が当時の生活に思いを馳せるのに役立っている。
③市民が、積極的に文化遺産や周辺の環境を守り、街づくりに参加した記念碑的な場所である。市民主導の遺跡保存実現は全国初のことであった。
④国会での審議では、埋蔵文化財保護の基準や考え方が明示され、その後大きな影響を与えたものとみられる。
⑤加曽利貝塚の保存運動や発掘調査に関わった多くの学生や研究者が、今日の考古学や埋蔵文化財行政を担っている。ここでの経験が各地で活かされたものとみられる。全国の埋蔵文化財保護の歴史からみても、とくに重要な遺跡の一つといえる。

第８章第３節（２）

（２）文化財の活用に与えた影響

①昭和 37(1962)年の発掘調査時から積極的に調査状況を市民に公開し、保存運動では野外博物館の整備が要望の一つとして掲げられた。その後、昭和 41(1966)年に千葉市立加曽利貝塚博物館が開館して以降、現地保存型の野外博物館を目指した取組みが進められ、その後の全国各地での史跡整備、博物館整備のモデルの一つとなった。

②発掘調査で検出された竪穴住居跡群や貝層断面を露出させ展示・公開している野外観覧施設では、昭和 42(1967)年の覆屋建設以降、露出面の乾燥、カビやソウ類の繁茂、析出物の発生を防ぐため、東京文化財研究所の協力のもと保存科学技術を実験的に応用し、試行錯誤が繰り返されてきた。半世紀に及び安定した状況で公開を継続しているとともに、加曽利貝塚で培われた技術が各地の遺構保存に反映されていった。

③博物館では、開館当初から「縄文土器製作技術の研究」をテーマに実験考古学的な研究が進められてきた。その成果に基づき、昭和 47(1972)年から市民による縄文土器づくりが開始され、昭和 49(1974)には「加曽利貝塚土器づくり同好会」が発足し、現在まで活動を続けている。市民による実験考古学的な活動の先駆的実践例として位置づけられる。

④昭和 48(1973)年に行われた博物館常設展示の展示替えでは、加曽利貝塚＝干し貝加工場説を証明するべくテーマ展示を展開し、各展示に担当した学芸員・外部研究者の氏名を掲示し、それぞれの研究に基づく最新成果を反映させた。テーマ展示の先駆的実践例として位置づけられる。

⑤加曽利貝塚の発掘調査は県内の学校教育関係者にも大きく受け止められ、加藤公明による「加曽利の犬の謎を追う―縄文人の生活―」をはじめ、授業で積極的な活用が図られた。地域の素材を歴史の授業に活かす先駆的事例であるとともに、発掘調査の成果をもとに討論型の授業を展開することで、より歴史を構造的に捉えることができる可能性を示した。

第４節　加曽利貝塚の今日的意義と今後の活用

１　加曽利貝塚の今日的意義

ここまでに、日本列島の貝塚の重要性を再確認し、東京湾東岸の貝塚がなかでも重要性が高いこと、加曽利貝塚は東京湾東岸の貝塚のなかでも卓越した存在であることを述べた。また、加曽利貝塚が考古学研究の出発・発展に大きな役割を果たしたこと、開発の危機を乗り越えて史跡指定が実現し、指定地外の環境も含めた広域が保全されてきたこと、首都圏の住宅街のなかに、これだけ広大な範囲が保全されたことは奇跡的なことであることを下の１枚の写真が物語っている。

＜加曽利貝塚の周辺が住宅街に取り囲まれていることがわかる航空写真を提示する＞

これを支えてきたのは、学術的な成果価値づけの積み重ねや、当遺跡に関わってきた多くの人の思いや努力の積み重ねである。加曽利貝塚は、学術的な価値が高いだけでなく、明治時代以来、附加されてきた価値がとても大きいことも特徴である。研究や保護・活用に関して、これほど分厚い歴史をもつ遺跡は、あまり存在しないであろう。

さらに、全国の発掘成果によって、縄文時代観や遺跡のもつ力に対する見方が大きく変わりつつある。近年の縄文時代の資源利用研究の高まりにより、資源利用に関する資料がもっとも豊富な貝塚の存在意義がさらに増している。また、多様で新鮮な食材の利用に代表される日本の伝統的な資源利用のあり方や食文化が、世界的にも注目を集めている。加曽利貝塚の重要性は今後さらに高まっていくものと言えよう。

２　今後の活用

以上のような加曽利貝塚の価値をどのように守り育て、さらに新たな価値を創造していくかが、最も重要な課題である。

千葉市では、この報告書の作成と併せ、「史跡加曽利貝塚保存活用計画」を平成 29 年１月に策定し、加曽利貝塚の今後の保存活用の方針とその方法についてまとめた。

同計画では、「史跡加曽利貝塚の目指すべき姿」として大きく４つの項目を提示した。

①縄文文化と貝塚の性格を究明し、調査研究の成果を世界に発信していく拠点

②研究成果に基づき、縄文時代の景観と人々の暮らしが体験できる史跡

③多くの人が集い、地域交流の中核を担う拠点

④人々の長い歴史を学び、自然と調和・共存する持続可能な未来を探る史跡

史跡の価値を確実に未来へ守り伝えていくことは勿論だが、加曽利貝塚を縄文文化と貝塚の調査研究の拠点として位置づけ、新たな価値を創造・発信していくとともに、その成果を現代社会に活かし、多くの人々が集う場となるよう、史跡の活用を図っていきたい。

３　結び～加曽利貝塚のさらなる究明に向けて～

最後に、過去の調査成果の総括を通じて見えてきた新たな課題をまとめ、今後、加曽利貝塚で進めていく調査研究の方針を示し、結びとしたい。

＜第７章第８節にある課題を抜粋、今後に向けたものとしてまとめる＞

・地形測量と過去の調査地点の明確化

・旧調査地点の再調査と計画的学術発掘の実施

・貝層調査・分析方法の確立

・集落構造や遺跡の形成過程の解明

・生産活動や社会・経済の解明

・新たな調査・研究に向けて